

## 歴史の中のナニワイバラ

中国中南部や台湾に原産し、ラオス、ベトナムなどにも分布。中国語名は金櫻子（きんおうし）、葉として果実が用いられたため、日本にはかなり早くにもたらされたという。茶道宗徧（そうへん）流の流祖（1627-1708）が好んだため宗徧薔薇（そうへんばら）とも呼ばれ、ほとんどバラを花としては用いない茶道において、例外的に茶室で生けられることがある。

日本の文献上での記録として、古いものでは1695年（元禄8年）に江戸の植木屋、伊藤伊兵衛三之丞（いとういへいさんのじょう）が出版した「花壇地錦抄（かだんちきんしょう）」に「ちょうせん荊（いばら）」の名で「白大りん花形つばきのごとし」と記されている。1698年（元禄11年）には貝原益軒が「花譜（かふ）」に「なにはいばら、花しろくひとへにして大なり」と記している。

さらに伊藤若冲は「薔薇小禽図（ばらしょうきんず）」1765年（明和2年）につる性のコウシンバラとともにナニワイバラを描き、また、酒井抱一（1761-1829）は「十二月花鳥図」にテッセンとナニワイバラを描いている。



「薔薇小禽図」  
伊藤若冲 1765年（明和2年）  
宮内庁三の丸尚蔵館 所蔵

## アメリカのナニワイバラ

アメリカではチェロキー・ローズという名で知られ、ネイティブ・アメリカンの伝説がある。それによれば、昔、チェロキー族が大虐殺を受けたとき、精霊たちはドワンザという娘を守るため、彼女をバラの姿に変えた。はじめそのバラには刺がなかったが、不注意な通行人に踏まれ、傷つくバラを哀れんで、精霊たちはそのバラの茎と果実に鋭く曲がった刺を与えて身を守るようにした、という。ジョージア州北部には19世紀初頭、ゴールドラッシュで開拓者が殺到し、そこに住んでいたチェロキー族は1838年、オクラホマ州へ強制的に連行された。その行軍は厳しくたくさん死者を出し、「涙の旅路 Trail of Tears」と呼ばれる。ナニワイバラはその道にそって見られ、「チェロキー族の母親の涙で湿りけを得た土に、人々の希望の印として偉大な精霊がチェロキー・ローズの花を咲かせた」という伝説もある。牧場等の生け垣にも多く使われて広まり、各地で野生化し、ジョージア州の州花となっている。



貝殻亭リゾートの大ナニワイバラ

仏蘭西料理 貝殻亭の大ナニワイバラ  
1984年植樹  
幹の直径 43cm 幹の周囲 138cm

### 仏蘭西料理 貝殻亭とナニワイバラ

二十数年前、あるフレンチレストランの初代のオーナーが、ひと苗のナニワイバラをエントランス脇に植えました。その苗はすくすくと成長し、レストランの屋根に向かって伸びていきます。

時が経ちレストランのオーナーが代わっても、ナニワイバラは何事もなかったかのように成長を続けます。やがて屋根一面を覆う日本一の大ナニワイバラとして、毎年春になると純白のドレスをまとい、春の訪れを近隣の方々にお知らせするようになりました。

ひと月ほど咲き誇った後、可憐な一重の花びらが散っていく姿に、過ぎ行く時の流れを思わずにいられません。

この大ナニワイバラの枝を、挿し木として生まれた、たくさんのナニワイバラが、今日もどこかで育っています。そのバラたちも、いつかこのような姿を見せてくれることでしょう。



ナニワイバラ  
学名 *Rosa laevigata* (ロサ・ラエウィガータ)  
開花時期 4月中旬～

